

機関番号：12501

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20500513

研究課題名 (和文) 運動実践における思考の独自性 -身体運動の現象学的分析-

研究課題名 (英文) Originality of thinking in movement practice -a phenomenological analysis of human movement-

研究代表者

瀧澤 文雄 (TAKIZAWA FUMIO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：50114294

研究成果の概要 (和文)：本研究において、運動の習得過程を現象学的に分析することによって、運動実践における身体的思考の論理を明確にした。まず、身体的思考 (非言語的思考) を際立たせるために、運動実践における言語使用の限界を検討した。さらに、〔動作〕という概念を身体的思考との関係から再検討し、運動実践そのものの独自性を探った。その結果、言葉を使わず、下位〔動作〕を使用する、運動実践に不可欠な思考 (身体的思考) が明らかになった。

研究成果の概要 (英文)： In this research, the logic of human bodily-thinking (nonverbal thinking) was made clear, through phenomenological analysis about the acquisition process of human movement. At first, limit for the language use was examined in movement practice, in order to make aspect of nonverbal thinking for human movement conspicuous. Then, the originality of the movement practice was explored, by reexamining the concept of “actcept” from its relation with human bodily-thinking. As a result, it is clear that the nonverbal thinking based on low-rank actcepts is essential in movement practice.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：体育哲学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，身体教育学

キーワード：身体教育学，運動実践，思考の論理，現象学

1. 研究開始当初の背景

運動を実践する際には、言葉で考える (言語的思考) だけではなく、実践のための独自の思考 (身体的思考) が必要となる。この二つの思考を明確に区別しなければならない。なぜなら、教育現場においては、言葉による運動指導が優勢であり、それについて何ら問い返すこともなかったからである。他方、実

践家は言葉による指導に懐疑的であったことも事実だからである。

思考については、これまで体育学において言葉との関係から研究されてきた。体育の授業においても、言葉で考えることが重視され、運動を引き出す言葉についての研究がなされてきた。しかし、言葉での説明がそのまま運動実践につながるわけではない。その原因に、言語的思考と運動実践との関係が明確に

なっていない、ということがある。そればかりでなく、運動を具体化する思考、すなわち、実践を可能にする思考が明示されていないからである。運動の習得の際には、言葉によらない思考、すなわち「からだ」で考えることが必要となる。

人はどのようにスポーツ（運動）を習得し実践するのか。その際、人はどのように考えているのか。運動実践は研究対象として様々なレベルから捉えることができる。しかし、個々人が運動を習得し実践するために必要となる思考については、関連する成果が体育心理学において散見されるのみであり、ほとんど未開拓の領域である。身体運動とは何か、運動を実践するとはどういうことかを問い、この独自の思考にはどのような論理があるのかを探ることは、体育の実践を考えるために必要不可欠であり、体育学には欠かせない領域となる。理論と実践を統合することは体育学にとって重要な課題である。

これまでの研究において明らかなように、身体的思考という発想は日本だけでなく、イギリス、ドイツ、そしてアメリカにおいても見あたらぬ。本研究テーマで扱う身体に注目した「運動実践における思考の論理」を研究することは、世界的に新たな試みだと言える。また本研究は、運動習得を容易にするばかりでなく、運動指導を有効にするための基礎的研究でもある。

2. 研究の目的

本研究の最終目的は、「運動実践に不可欠な思考の論理」を提示することである。このために、運動実践と身体的思考との関係を探り、運動習得における身体的思考の役割を明確にする。さらに、身体的思考の論理を明示する。

この論理には、下位〔動作〕の論理が強い影響を与えている可能性が大きい。〔動作〕とはある動作を生じさせる「感じのグシュタルト」である。運動習得の際、学習者は言葉ではなく、その下位〔動作〕を使って思考しなければならない。しかも、その下位〔動作〕を選定し、修正し、発展させなければならない。このことについて考察することが今回の中心となる。

3. 研究の方法

本研究は文献研究を参照しつつ、実践での思考の独自性について、現象学的な分析を行う。この方法は実践の中で意識に現れる事象について、解釈を加えず分析する方法である。このことによって、科学的研究では捉えることのできない理論的構造を提示することが可能となる。

研究の手順は以下の通りである。初年度は、本研究の目的を達成するために、理論構成を中心に論点を明確にするための研究を行う。すなわち、これまで行ってきた本テーマに関連する研究成果を検討し直し、本研究の問題点の整理および研究の枠組みを検討する。さらに、運動実践における思考との区別を際立たせるために、特に言語的思考に関わる先行研究を収集・検討する。また、先行研究についての検討の際には、思考関連だけでなく、関連する領域の新たな文献、すなわち言語学、運動学、教育学、哲学について収集・検討し、身体論についての哲学的（現象学的）考察も続行する。

上記研究において、特に言葉についての研究が当該年度の焦点となる。同時に、身体的思考（非言語的思考）を明確にするための前段階として、言葉による思考の論理を文献研究によって明らかにする。言葉は運動実践において重要な働きをするが、どのような場合に言葉が重要になるのか、また限界を持つのかを検討する。このことは、運動実践における言語的思考の限界について研究することでもある。すなわち、運動実践の独自性を捉え直し、このことによって運動指導場面における言葉の使用にも示唆を得る。

2年目は、運動実践の独自性を明示し、さらにその実践においてどのような思考が生じているか、その思考の独自性とは何か、について研究する。運動習得においては、言葉は糸口にはなるが、それだけでは運動を習得できない。それはなぜか。さらに、言葉を使わない思考（非言語的思考）がなぜ運動の習得に必要なものか。これらの事柄について研究する。その際、運動実践そのものの独自性もまた明示しなければならない。よって実践中の思考を分析する前に、現象学的分析が容易な身体運動の習得過程を分析することになる。すなわち、運動実践と〔動作〕との関係、および身体構造化を問い直す研究を同時に行いたい。その際、〔動作〕の概念自体を再検討することによって、より実践に根ざした思考を分析し、それを身体的思考として言語的思考との差異を明示する。

以上の研究を検証するために、夏期休暇中にドイツ・ケルン国立スポーツ大学に滞在し、大学図書館を中心に情報収集およびスポーツ哲学者と討議する。同大学を選定した理由は、ケルン国立スポーツ大学が伝統のある唯一のスポーツ単科大学であり、体育・スポーツ関連の蔵書が多く、博物館も備えた大学だからである。

最終年(H.21)には、さらなる文献研究を加えることによって、前年度までの成果を受け、運動習得における身体的思考の役割を明確

にする。さらには、学会に参加して意見交換をし、資料収集および理論的枠組みを整理することによって、運動実践に不可欠な思考の論理を明示する。

4. 研究成果

平成 20 年度は、身体的思考（非言語的思考）を際立たせるために、運動実践においてどのような場合に言葉が重要になるのか、またその言語使用は限界を持つのかを検討した。このことによって、運動実践の独自性を捉え直すと同時に、運動指導場面における有効な言葉の使用にも示唆を得た。「運動実践における言語の役割とその限界」をテーマに、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された国際会議：2008 スポーツ哲学研究セミナー（Research Seminar for Sport Philosophy 2008）を兼ねた第 30 回日本体育・スポーツ哲学会において発表を行い、運動指導における言語使用について議論した。

発表の概要は以下の通りである。「身体的思考は言語とは異なった論理を持っている。それは〔動作〕を作り出すための論理であり、知覚の論理を基盤にして獲得された構造としての身体が保持している下位〔動作〕によって可能となる。〔動作〕とは、運動主体の知覚内容がゲシュタルト化したものである。この下位〔動作〕によって、映像、説明、資料がみずからの実践として翻訳され、具体化できる。手続きの説明でさえ、下位〔動作〕へと翻訳し理解する必要がある。その下位〔動作〕自体は、語が洗練されていくように、応用の利くものとして洗練され続け、より明確な知覚内容となる。さらに、下位〔動作〕の洗練化のみならず、日常的に主流となっている言語的思考から、動作を作り出す身体的思考へと翻訳する能力もまた学習しなければならない。要するに、説明のためではなく、みずからが実践するために必要な思考として身体的思考があり、それが、身体を構造化しつつ〔動作〕を洗練化していく。その身体的思考に下位〔動作〕が不可欠である。体育の授業を理論だけでなく実践を裏切りますものにするために、下位〔動作〕自体を伝達可能にしていかなければならない。」

平成 21 年度は、運動実践には言葉による思考だけでなく、言葉を使わない思考（非言語的思考）が不可欠になる、ということについて考察した。運動の習得過程を現象学的に分析すると共に、〔動作〕の概念自体を身体的思考との関係から再検討し、運動実践そのものの独自性を探った結果、下位〔動作〕を使用する思考（身体的思考）が明らかになった。このことについては、「身体的思考における下位〔動作〕の役割」というテーマで日

本体育・スポーツ哲学会（北海道教育大学旭川校）で発表した。

発表の概要は以下の通りである。「外面的な指摘や客観的な説明は外に現れた結果についてのものである。その結果を糸口に、実践者みずからが運動を修正することはとても困難な課題となる。なぜなら、その結果を生み出している〔動作〕が意識できなければ、指摘された動作を修正できないからである。動作を修正するためには、〔動作〕の修正に関連する指摘をしなければならない。その為には、運動についての説明と運動の実践との差異を明確にする必要があり、実践に必要な身体的思考が生ずるような言語使用を自覚する必要がある。客観的な説明は、言語的に理解することであり、物事を対象化し客観的に観察した結果である。それに対して、動くためには、みずからの身体能力によって外界との関係を築く必要がある。つまり、最低限必要なことは、運動を外側から観察する視点ではなく、運動主体の視点から現象を捉えることである。指導者が学習者の運動を引き出すには、既に保持している〔動作〕を確認させ、それを変容させて、新たな〔動作〕を分節させるように、言語を使用する必要がある。要するに、運動の習得や実践に不可欠なのは、実践における言語的思考の限界を見極め、運動実践を有効にするために言語がどのような役割を持っているのか、を確認し使用することである。」

夏期休暇中には、ドイツ・ケルン国立スポーツ大学に滞在し、大学図書館を中心に情報収集し、さらに同大学のスポーツ哲学者（シュールマン博士）と面談・討議した。また、前年度の研究成果として、「運動実践における言語使用とその限界」が「体育・スポーツ哲学研究」掲載された。

最終年にあたる平成 22 年度は、運動実践における思考の独自性を明示するため、文献研究の検討を引き続き行い、運動習得における身体的思考の論理を明確にした。8 月末には体育・スポーツ哲学会（新潟）に参加し、意見交換を行った。9 月には、これまで行ってきた 2 年半の研究成果を踏まえ、平成 22 年 9 月 15～19 日開催の第 38 回国際スポーツ哲学会（ローマ：イタリア）において、「運動実践における思考の論理-身体的思考の現象学的考察-（Logic of thinking in human movement practice -Phenomenological consideration of human bodily thinking-）」というテーマで発表し討議を行った。

本発表の概要は以下の通りである。「身体的思考の持つ独自性として〔動作〕、思考方法、瞬時性と決断性に関してそれらの論理を列挙し説明した。要するに、身体的思考は、みずからが物や他者との関わりを具体化し、

実践的課題を解決するために必要となる思考である。つまり、重力を含めた物や他者の論理と、主体の身体的能力との関係から思考を構成しなければならない。もともと、ヴァイツェッカーのゲシュタルトクライスにあるように、環界と運動は円環しているのである。しかも人間の場合には、ユクスキュルの述べる動物の環境がシグナルであるのに対して、シンボルとして分節・同定され、さらに自らの身体的能力が変容し進展し続ける。その際の身体的コミュニケーションの結果として〔動作〕が蓄積される。だからこそ言語的思考だけでは実践ができるようにならない。よって、実践できるという身体的能力には身体的思考が不可欠となる。個々人の実践能力を育てるためには、身体的思考の論理を了解し、習得する必要がある。」

学会後は、本研究のまとめを行うとともに、平成 21 年度研究テーマであった「下位〔動作〕」について、「身体的思考における下位〔動作〕の役割」というテーマで体育学研究に投稿中である。さらに、3ヶ年の研究成果として「運動実践に不可欠な身体的思考の論理（仮題）」という表題で、体育・スポーツ哲学研究に投稿を予定している。また、本研究の成果を活かした運動指導論が新たに必要であり、それを探ることが新たな課題として生じている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ① 瀧澤文雄、運動実践における思考の独自性-身体運動の現象学的分析-、平成 20-22 年度科学研究費助成金(基盤研究 C)研究成果報告書、査読無、2011、総頁数 76。
- ② 瀧澤文雄、運動実践における言語の役割とその限界、体育・スポーツ哲学研究、査読有、Vol. 31-1、2009、75-85

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 瀧澤文雄、運動実践における思考の論理-身体的思考の現象学的考察-、第 38 回国際スポーツ哲学会、2010. 9. 17、ローマ(イタリア)
- ② 瀧澤文雄、身体的思考における下位〔動作〕の役割、第 31 回日本体育・スポーツ哲学会、2009. 9. 6、北海道教育大学旭川校
- ③ 瀧澤文雄、運動実践における言語の役割とその限界、第 30 回日本体育・スポーツ哲学会、2008. 9. 14、国立オリンピック記念青少年総合センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀧澤 文雄 (TAKIZAWA FUMIO)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：50114294